



Title	イタリア家族史研究所紹介 : Herlihy, Klapisch-Zuber, Barbagliらの業績を中心に
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 3, p. 255-279
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イタリア家族史研究書紹介

—Herlihy, Klapisch-Zuber, Barbagliらの業績を中心に—

米 山 喜 晟

は じ め に

John Koenig は、その著『13世紀北イタリアの《ポポロ》』⁽¹⁾の序章で、北イタリアの各都市におけるポポロと貴族の関係を論じるに先立って、13世紀フィレンツェ史に関する階級闘争的解釈についての評価の変遷を簡明にトレースしている。それによると、まず1899年 G. Salvemini があの古典的著述『1280年から1295年までのフィレンツェの豪族と人民』⁽²⁾を発表して、明確にマルクス主義的な解釈を行ったのに対し、1920年 N. Ottokar が『13世紀末のフィレンツェのコムーネ』⁽³⁾によってそうした解釈を否定、Salvemini の階級闘争理論の代りに「指導的階層 (ceto dirigente)」の理論に基づく解釈を示した。

その後1974年に、J. Heers は『中世における家族的クラン』⁽⁴⁾を発表して、Ottokar 的解釈を補強すると同時に、マルクス主義的解釈は「もっぱら歴史家の幻想の所産」⁽⁵⁾でありうるとし、現実が生じている諸事件の政治的社会的側面を底で支えている構造中最も主要な要素は「家族」または家族の集合体である「クラン」であると指摘した。このように13世紀フィレンツェ史に関する Ottokar 的解釈は多くの研究者に受容され、さらにそうしたフィレンツェの実例を、北部および中部イタリアのポポロ的体制解釈のプロトタイプとして用いようとする試み（たとえば Ph. Jones⁽⁶⁾）が行われているとされる。Koenig 自身は、北部イタリアに関する自分の見解が、むしろ Salvemini 的解釈に近いことを明言しているのであるが、それだけに一層フィレンツェに関しては、Ottokar 的解釈が一般的に受け入れられているといえるであろう。

もっともフィレンツェ史解釈の変遷は、実際にはそれ程単純なものではなかったようである。Salvemini の研究成果も、勿論孤立して現われたものではなくて、イタリアのアカデミズムの近代化への努力の一端として生れて来たことは今さら指摘するまでもないだろう。一時期あの Croce すらマルクス主義者であったという事実からも明らかな通り、しばしば趣味的関心に引き摺られやすく、しかも E. H. Carr などが指摘した通り無限の資料探索に埋没するきらいのある実証主義を克服するための最も有効な理論として、マルクス主義的歴史理論に熱い期待が寄せられたのであり、Salvemini のフィレンツェ史研究はそうした風潮の最も傑出した試みであった。また Salvemini 自身も、P. Villari や C. Paoli らのすぐれたフィレンツェ史研究の伝統に沿って

研究を進めており、特に Villari のフィレンツェ史研究には、Salvemini の業績を先取りしているような性格が強い。大体階級闘争史観が、普遍的事実の表現として受け入れやすかった理由の一つは、ヨーロッパ知識人の共通的教養であったローマ史の事実を負う所が大きかったように思われる。特にイタリアでは、Machiavelli 等ローマ史を下敷きにして歴史を眺めかつ記述する伝統が残っていたので、そうした解釈になじみやすいという背景があったといえるだろう。

Ottokar は、Sansoni 社から刊行された Villari のフィレンツェ史⁽⁷⁾の序文に、必ずしも実証されているわけではない事柄を上手に書いているという趣旨のことばを寄せていて読者の苦笑を誘うのであるが、いわばそうした流れの中から、Salvemini の研究が生れて来ているのである。

また Ottokar の批判も、決してそれほど暖かく迎えられたわけではなかったようである。事実ドイツのジャーナリスト上りで、後半生をフィレンツェ史研究に賭け、索引を含めて8巻の大著『フィレンツェ史』⁽⁸⁾を遺し、また貴重な資料集『フィレンツェ史研究』⁽⁹⁾を残した R.Davidsohn も、Ottokar よりむしろ Villari や Salvemini に近い立場で研究や記述をすすめていた。その後たしかに J.Plesner のような熱烈な支持者に恵まれてはいたものの、全体としては、やはり Villari 以来の伝統が根強くて、Ottokar の批判が完全に説得的であったとは見せないだろう。

事実 S.Raveggi ら4人の研究者が共同で行なった13世紀後半の研究⁽¹⁰⁾も、具体的には Ottokar の立場に近いといえそうだが、しばしば Salvemini の仮説の中でも評価すべき点を取り上げており、逆に Ottokar の不十分な点をも指摘している。すでに見た通り、Koenig 自身はむしろ Salvemini 的方法を北イタリアの都市に適用しようとしているのだが、たとえその場合でも「指導的階層」という概念は無視し難いし、その具体的構成要素である家族やクランを無視して研究をすすめることはもはや不可能だといえるであろう。

必ずしもこうした文脈のみによるのではなくて、他の都市に比してはるかに文献に恵まれているという事情にも影響されたものと思われるが、今世紀後半のフィレンツェ家族史の研究にはいくつかの目醒ましい成果が認められる。

たとえば R.A.Goldthwaite はその著『ルネサンス期フローレンスの私的富—4家族の研究—』⁽¹¹⁾において、中世の末期からいわゆるルネサンス期にかけて、フィレンツェでは拡大家族 (extended family) の細分化が進行し、個人の比重が高まり、女性の権利も強まったとする説を提起した。実は筆者も興味深かったので他の批判的意見も併記してではあるが、その説を簡単に紹介⁽¹²⁾した一人であるが、天網恢々とも言おうか、F.W.Kent⁽¹³⁾がその9年後、同じプリンストン大学出版部から出版した書物でこの説に猛烈な批判を加えて、一大論争の観を呈し、やはり後で出た Kent 説の方が今日では有力なようである。Goldthwaite の説は Burckhard 以来の近代の先駆としてのルネサンスという概念と一致するもので、それだけに批判も激しかったものと思われる。別に私自身はこの説の信奉者でも何でもないが、彼が挙げている事例自体は実証的資料に依拠している以上、後に反論が優勢になったからといって、完全に腐ってしまうもので

はないと思う。わが国ではこうした場合、旧説だというだけで価値を失ったように考えられ勝ちな感じがする。私自身は、Dante が証言している中世末期のフィレンツェ社会の変質は、勿論 Goldthwaite とは立場を異にするが、極めて重要な意味を持っているのではないかと考えており、現象的には個性の確立と呼べる変化も認められた（勿論一部の階層においてではあるが）と考えているのであり、家族史自体としては Kent の立場に軍配を上げるとしても、Goldthwaite の問題提起に対しては、評価すべき点があると考ええる。この論争に関しては、後に紹介する二著がいずれも触れているので、再び採り上げることになる。

こうした論争が生じたという事実や、どんな事情があったのか知らないが、L.B. Alberti の『家族論 (Della famiglia)』の翻訳が、アメリカからほとんど相次いで二冊⁽¹⁴⁾刊行されたという事実からも、特に欧米において、いかにこうした方面への関心が高まっているかが推察できるであろう。

そうした数々の業績の中で、特にすぐれており、後世への影響も重大と思われるものをただ一点選ぶとすれば、研究者たちの評価はほぼ異口同音に、D. Herlihy と Ch. Klapisch-Zuber の共著、『トスカーナ人とその家族—1427年のフィレンツェのカタスト（課税用不動産台帳）の研究—』⁽¹⁵⁾に落ち着くものと思われる。そこで先ずその内容を簡単に紹介しておきたい。また Herlihy と Klapisch-Zuber には、個別にすぐれた家族史の論文集があるので、それにも多少触れておきたい。

私自身の関心のために、本稿の視点が中世・ルネサンス期のフィレンツェに片寄りすぎたきらいがあるが、第二次大戦後のイタリア人自身の関心は、むしろ明らかに近現代に偏っているといえるだろう。だからイタリア人のこうした関心が産み出した成果を無視することは許されないだろう。残念ながら私には前著の場合程の確信を持ってこの1点を選ぶほどの知識が不足していることを、先ず白状しておかねばならない。そこで話題性に頼ることにして、英国ケンブリッジ大学で行われた P. Laslett らの家族史研究が近年わが国の歴史研究にも深い影響を及ぼしつつあるようで、⁽¹⁶⁾イタリアでも同じような事情があるらしい。明らかにこうした影響下で生れた M. Barbagli の『同じ屋根の下で—15世紀より20世紀までのイタリアにおける家族の変化—』⁽¹⁷⁾の紹介を加えることによって、先に述べたような不備を多少とも補うことにしたい。

第一章 D. Herlihy, Ch. Klapisch-Zuber 共著『トスカーナ人とその家族』

この作品は1978年にフランス語版がパリで刊行され、それから10年後にボローニャのイル・ムリーノ社から、イタリア語の翻訳（翻訳者 Mario Bensi）が出版された。イタリア語版の序文によると、著者たちが研究を完成して以来20年の才月が過ぎているので、学会は本書で扱われている問題や方法に馴染んでしまい、もはや執筆当初に有していた意味はかなり失われているとされているが、わが国の学会にとってはまだほとんど未知に近い分野である上に、本書に盛りこまれ

ている資料の持つ価値は、様々な角度からそれを利用することが可能なので、将来いよいよ重味を増すものと予想される。そのことは、次の章で紹介する作品を通して、ある程度裏付けることができるはずである。文字通り画期的だと評するに足る作品なので、紙数が許される範囲で概要を紹介したい。

先ず全体の構成を眺めると、イタリア語版は以下の通りである。

「イタリア語版への序文	P. 7
跋	9
序文	13
第一部 資料	
第一章 1250年より1427年までのフィレンツェのコムーネにおける財政制度	19
第二章 カタスト（課税用不動産台帳）に関する法律	65
第三章 1427年より1430年までのカタストの作成	107
第二部 カタストの契機（モメント）	
第四章 フィレンツェの領域（K）	153
第五章 免税と特権（K）	187
第六章 1300年より1550年までの人口動態	227
第七章 死のサイクルと生のサイクル	259
第三部 人口と資産	
第八章 人口地図（K）	299
第九章 富の配分	329
第十章 経済活動（K）	363
第十一章 移住の動態（K）	401
第十二章 男性と女性（K）	441
第十三章 若者と老人（K）	475
第四部 人口反応と社会環境	
第十四章 結婚	533
第十五章 出生	569
第十六章 死	601
第十七章 家族単位（K）	637
第五部 家族のイメージ	
第十八章 親族と姻族	709
第十九章 幼少期と青年期	747
第二十章 成年と老年	795
附録	845

文献目録

895

人名索引

933

以上の目次の中でKと記された8章が Klapisch-Zuber の執筆によるもので、その他の12章が Herlihy が執筆した箇所である。しかし両者の度重なる討論の結果なので、整合性は保たれている。とはいうものの、やはり時折り重複が認められるようである。なお跋によると、この研究にはコンピュータが大いに利用されており、その限界を示すのにも役立ったとされているが、歴史研究にコンピュータを徹底的に利用した先駆的な実例の一つであって、たしかにそうした研究の長所と共に、欲を言えば機械的処理の繰返しから生じる単調さのようなものが感じられなくもないと言えそうである。それぞれが貴重で、時には意外なデータであるにもかかわらず、余りにも連続して提示されると、個々の意味を深く検討する余裕もなく、平板に受けとめてしまうおそれがある。勿論それはむしろ受取り手の責任であって、15世紀の一都市国家について、かくも鮮明で多面的な資料を提供したこと自体、すごいことだと認めなければならないだろう。

序文は、この研究が1427年以後3年間に作製されたフィレンツェの収税のためのカスト（不動産台帳）を基盤にしており、それは当時のフィレンツェ共和国の領内にあったフィレンツェと他の六都市（ピサ、ピストイア、プラート、アレツォ、ヴォルテッラ、コルトーナ）とその他の小都市およびそれらの周辺部（コンタード）の約60,000家族、260,000人に関する動産、不動産その他に関する多くの資料を含むことを示す。15世紀当時のトスカーナはこれほどの資料を残している点で、「ヨーロッパのあらゆる国においておそらく唯一の地方」⁽¹⁹⁾だとされている。これらの豊富な資料を、コンピュータにかけて徹底的に分析した研究なので、本書は当然家族史のみならず、人口史、都市史（特に都市経済史と都市財政史）、社会史等様々な側面の貴重な資料を豊富に含んでいる。本稿では家族史自体の資料に取組む以前に、家族史以外の側面をも簡単に眺めておくことにしたい。

第一節 カストから見たフィレンツェ共和国

第一部（第一～三章）は、資料の成立過程の検討のため、フィレンツェのカスト以前の税制や、カストの成立過程とその推進者、カスト制における担当委員の評価基準、先例となったヴェネツィアのカスト制との差、カスト委員の作業の実態等々について多くの貴重な情報を含んでいる。先ず13世紀末ごろまでは、フィレンツェは土地資産に基づく直接税（estimo）中心の税制であったが、その後関税等間接税の比重が高まり、1338年には市の収入の4分の3を間接税が占めるに至ったという。それにつれて周辺部の固定資産税等は大幅に緩和されたとされていて、一時期重要視されていた都市による田舎の収奪という問題は、少なくとも税に関しては必ずしもこの時期の実情には合わないのではないかと思われる。しかし度重なる戦争と傭兵制の進展は、市政府に国債の発行を余儀なくさせ、その強制的な割り当ては、富裕だという噂に基づい

で行われたので、多くの市民を悩ました。他方5%の利子では国債の買い手が少なく（時には目標額の54%）、8%～10%への利子引き上げも大した効果はなく、また国家財政の負担を重くしたため、より公平なカスト制度に向わざるを得なかったわけである。Machiavelliら歴史家は、Giovanni dei Mediciをこの制度の推進者だとしているが、実は寡頭派の長でMedici家を抑圧していた派のリーダーRinaldo degli Albizziこそこの制度の推進者だった。むしろGiovanniやその子Cosimoらは、この制度に対する田舎の反対者と協力関係にあった程で、追放から帰国して実権を握ったCosimoは、父同様この制度に対し成行きまかせの態度を取ったとHerlihyは見ている。ヴェネツィアにも類似の制度があったが、純然たる資産税であるヴェネツィアとは異なり、フィレンツェでは市内とピサで18～60才、領域部で15～70才の男子に対する人頭税的要素が加えられているという。

1427年5月24日にカスト制に関する法律が制定され、10人の「カスト委員(ufficiali del Castato)」が約1年の任期で関係機関を動員してカスト作成を担当、1427年以降3期にわたって選任され、また同法制定以来1年以内に「国勢調査(censimento)」を実施した。委員は平均年令50.5才（ちなみにプリーオーレは52才）、動産を多く持つ老成した商人たちが中心だったとされている。徴税の単位は「税を収める家族集団」で、「戸(fuoco又はpartita)」とも呼ばれ、要するに「家族」のはほぼ同義語である。こうした詳細な資料が生れた背後には、すべてを記録する中世商人の習性がある。一度記入された数字の訂正や修正の理由（追加や告発等）の統計も出ている。

第二部では、当時のフィレンツェ共和国の地域状況や人口が扱われている。当時フィレンツェは、1380–1406年の領土拡大の結果、トスカーナの約北半分を併合し、ピサその他6つの当時としてはかなり大きな他の都市を含み、山、丘、谷間等様々な地形よりなる領土を有していた。中世フィレンツェにおける市内の区割りは、12世紀末頃まで4区、その後6区となるが1343年以降4区に戻り、コンタードも同様に4区に分けられ、各区は教区に細分化されていた。なお本書第五章には、外人や聖職者とその団体についての記述があり、Villaniの時代、1,500～1,600人で全体の1.3%だった聖職者の数が、カスト当時は1,800～2,000人で約2.8%、コンタードを含めると3倍の密度（3.7%）に増大したものと推定されている。

人口動態についても、ペストが頻発した14世紀の激減ぶりについてのくわしい記述が見られ、プラートのように劇的な減少は見られなかったものの、フィレンツェでは14世紀前半120,000人に達した人口が、1380年ごろには42,000人にまで減少した後、14世紀末には60,000人にまで回復したものと推定されていて、ピストイア等も似た曲線を描くが、ピサは15世紀に入った後でも減少の一途を辿ったとされている。

1427年以後1550年までは、人口が安定した後に回復を示した時期で、特にフィレンツェ市内では1427年を100とすると、1552年には159.3、周辺部では同年に176.5と大巾な回復を示している。こうした人口動態の表やグラフが第六章に多数収録されている。14世紀フィレンツェの平均寿命

は、14世紀の第一四半期に40.14才だったのが、第四四半期には17.23才と、55.23%もの減少を示しているとされる。平均寿命を扱った第七章では、結婚年令や独身者の増加に関して、興味深い統計が見られるが、本稿ではそれらはまとめて後に検討することにして、先ず家族史の背景となる人口史や都市経済史に関する資料をまとめて簡単に眺めておくことにしたい。

第三部では先ず人口分布が扱われていて、全領土の人口密度は1 km²に24～24.5人、聖職者を加えると25人程度とされており、フィレンツェ周辺部の4区も24人乃至34人程度とされている。

Klapisch-Zuber は、人間の集落累積数の%を縦軸にし、集落の人口を横軸にした対数グラフを作製、その結果人口700～800人を境としてグラフ上にはっきりとした断層が生じることを示し、この700～800人ラインを越えると、集落は都市的性格を帯びるといふ、極めて興味深い仮説を立てている。こうした仮説から、一応800人以上の集落を都市として人口比率を計算すると、たとえば全領土に関しては、都市人口が全体の34%を占め、フィレンツェだけだと、都市人口対田舎の人口の比が1対1.232とされている。かなり都市化が進んでいたといえるだろう。

第三部では引続き富の分布が地域別及び階層別に把握されていて、いずれも極度の集中ぶりが問題になっている。階層的集中は家族と関連が深いので後で見ることにして、地域的集中を眺めると、フィレンツェ市内の人口は全領土の14.1%でありながら、動産の78.0%、全資産の67.4%、課税しうる富の65.0%を占めるのに対し、他の6都市（ピサ、ピストイア、プラート、アレツォ、ヴォルテッラ、コルトーナ）は10%の人口で、動産は13.2%、全資産の11.4%、課税しうる富の11.8%を有し、それらと15の町を除く田園部では、全人口の66.5%が動産のわずか5%、全資産の15.9%、課税しうる富の17.7%しか有していないという、富のフィレンツェ市内への極端な集中を示す数字が示されている。

カタストは、当時普及しつつあった折半小作制（mezzadria）についても資料を提供していて、この制度が領内の中心部、特にフィレンツェ市郊外の南部および同市周辺部一帯に先ず普及したことを示す。課税可能な富の多い地域や貸家主の多い地域が、折半小作制が最初に発達した地域とほぼ重なっているという事実が、市民の富が流出して当初この制度を育てたことを裏付けている。田舎の借金に関して、そのために逃亡する人が多く、富の流通が田園部の人々に有利に作用しなかったことが分る。またトスカーナ地方自体、ヨーロッパで最も物価高の地方だったことも推察できる。

中世末期のトスカーナでは、まだ酪農はごく一部の人々の活動だった。田園部にも職人が居り、約6%の人々が農業以外の職業に従事、肉屋、皮革職人、鍛冶屋、指物師、大工、公証人等が主な職業であった。

兎に角フィレンツェへの産業の集中は著しく、他都市で比較的発達していた金属工業ですら、最大拠点ピサでもフィレンツェの2割に達していなかった。こうした産業分布の偏りは、当然人口移動を惹起すが、出身地は記入されている場合でも、移動時期を知ることは難しい。外人の移動も把握されていて、フィレンツェでは2.1%が転入、1.3%が転出したとされ、周辺部の2区

からの移住を見ると、S.Spirito 区では全転出者中の34.0%、S.Giovanni 区では46.1%がフィレンツェに移住したとされている。

移住と階層の関係を見ると、フィレンツェ市内では、400フィオリノ以上の資産家（最高のクラス）が外国への移住者全体の27.2%を占めるが、田舎ではそうした特異な現象が生じておらず、フィレンツェ市内では富が、田舎では常識通り貧困が、外国へ住居を移す原因となっている。

男女の人口比を見ると、全領土では一般的に男性の方が多くて、ただ15～20才と40～60才の年齢層においてのみ女性の方がわずかに多い。要するに15世紀のフィレンツェは人口の男性化を体験したのであり、女性を100とすると、男性は1427年に118.9、1458年に123.8、1480年には126.7とふえるが、1552年には89.2と減少している。なお階層別に見ると、貧民層の方が出稼ぎ等の理由で男性の比が高い筈（20代で125が最高）だが、実際には1600フィオリノ以上の最富裕層が高く、40才代では173に達している。

カタストに関する興味深い事実の一つは、年齢に関して時折り虚偽の申立てがなされているという事実で、特に男性が実際より年長に申告したケースが多かったらしい。その理由は役職への被選挙権が得られる年齢（30才）にするためや、社会的影響力のためだけではなくて、偶数を好む傾向や、5や10等切りの良い数字への切り上げ（下げ）が盛んに行われたためで、人工ピラミッドは鋸の刃以上の乱調を示して統計を不正確にした。ペストも年齢別人口ピラミッドに影響を及ぼしたが、特に「子供のペスト」と呼ばれた二度目の大流行（1363－4年）は、幼児を集中的に襲ったので、人口ピラミッドを歪めた。さらに第四部（第十六章）では、フィレンツェ共和国の人々の死因に関する統計等も見ることができる。どうやらペストは、田舎や小都市に住む人々よりも、大都市に住む人々により重大な被害を及ぼしたものと推定されている。他にも興味深いデータが多数見られるが、一般的なデータはこの辺で切り上げて、以下で特に家族に関係の深い事柄を取り上げよう。

第二節 15世紀トスカーナの家族

先ず家族の資産についての成果を紹介すると、すでにトスカーナの資産に関して、フィレンツェへの集中が著しい（特に動産と国債に関して）こと、つまりわずか14%の人口で、全共和国領内の資産の3分の2以上を占有していたことを見たが、実はそのフィレンツェ市内においても、階層別の富の偏りが著しく際立っていたことが明らかにされている。すなわちフィレンツェ市内の家族の内、14%は完全に無一物だったのに対し、最富裕層のわずか1%の人々があらゆる資産の4分の1（全領土の資産の6分の1）以上を占有していた。フィレンツェで最も富裕な3000家族は、全領土中の家族のわずか5%に当たるが、領土内で納税している残りの57,000家族以上の資産を占有していた。特に国債はほとんどフィレンツェ市民の独占物であったが、それは動産以上に富裕階層に集中していて、最富裕層の約200家族（市民人口の2%）に、国債の60%が集中して

いた。ただしすでに見た通り国債というのは、戦争等非常の際に資産があると見なされた家族に対して強制的に割り当てられたもので、利率も当時としては低かった点を考慮すると、恩恵的であったとは決して言えない。事実 Herlihy は戦時中には富裕市民（ボボロ・グラッソ）がその富を吐き出さされるのに対して、小市民は傭兵として雇われて（戦争は例外的な場合を除くと、歩兵にとっては近代戦ほど危険ではなかったようだ）金もうけの機会を得たので、Giovanni Cavalcanti が、当時の大立物だった Rinaldo degli Albizzi のことばとして伝えている、「貧民は金銭の必要の解決を、戦争において見出す」という説に妥当な点があるとする (pp.358-9)。

土地、動産、国債等をまとめて、控除を差し引いた課税しうる富を比較する時、フィレンツェで最も富裕な一族とは誰だったか。このころはまだ Medici 一族がトップに達する以前で、53家族より成る Strozzi 一族が、各家族の平均資産3,724フィオリノで、一族を合わせると、全市の2.6%を占めてトップ、二位は60家族より成る Bardi (2.1%)、三位は31家族より成る Medici 一族 (1.9%)、以下18家族の Alberti (1%)、24家族の Albizzi (1%)、28家族の Peruzzi (1.1%) と続いて、人口のわずか2.5%によって、全市の商工業資本の債権の半分が占有されていたことが明らかになった。

それにもかかわらず、フィレンツェは他の6都市と比較すると、階層分化が著しい、中産階級の内部の差別化の進んだ都市だったとされている。つまり富者と貧者の完全な二極分解に陥らず、中間層が多少は発達していたわけで、それがルネサンス文化の発達に寄与した可能性が大きい。

だがこのように巨大な富の集積が生じると、当然それにふさわしい富者のモラルが問題になる。Poggio Bracciolini は必ずしもその真意と言えないかも知れないが、吝嗇を弁護したり、Alberti が目立たぬよう儉約すべしと説いた。だが Pontano が説き、老 Cosimo が実践した「気前の良さ」こそ15世紀当時の最も典型的な富者のモラルだったとされる。

また資産と職業の関係についても統計が示されるが、そこで奇妙な事実にぶつかる。それはこの調査の際に家長の多くが職業を申告しなかったという事実で、フィレンツェでは家長の43.5%、ピサでは44.6%が職業を明記していないということである。他方税金を免除されている貧民の失業率は15.7%で、全領土平均失業率の31%の約半分となり、結局1427年当時のフィレンツェやピサにおいては、最も資産に恵まれた階層（400フィオリノ以上）に、無職と公称する（フィレンツェでは実に46.2%）男性が多かったということになる。とはいえ最富裕層の家族はすでに見た通り銀行家や商人の一族だったので、封建貴族ではなく、結局投資や貸家等の資産の運営に頼って生きていたのであろうか。なお職業別に資産の階層の統計が棒グラフで示されている (P. 393) のを見ると、「職人、商人、サービス業者」のみが、資産の400フィオリノ以上の最富裕層の比率が、同業者全体の10%を越えているが、他のすべての職業では3%にも充たない。

次にフィレンツェおよびトスカナの結婚について検討しておきたい。私にはこのフィレンツェの結婚の特異性を明らかにしたことこそ、本書の研究の最大の成果、あるいは少なくともその一つであるように思われる。それは主に「生のサイクル」を扱った第七章と、「結婚」それ自体を

タイトルに掲げた第十四章で論じられている。

フィレンツェ市内の結婚には、当時その他の国々どころか、同市の周辺部と比較してさえ、特異だと思われる一つの特長があった。それが第七章で明らかにされている初婚年令の男女の差の大きいことである。(pp.282-3) すなわち1427年の12.7才差、1458年の11.0才差、1480年の10.8才差という数字は、同市周辺部の1427年における7.3才差(市内の57.5%)、1470年の6.7年差とは極端に異なっており、むしろ周辺部よりもフィレンツェ市内に性格が似ていた(そしておそらくフィレンツェを模倣した)と思われるプラート市内の1427年の9.3才差(フィレンツェの73.2%)と較べても、やはり相当な開きが認められるのである。この特色は早くも13世紀後半から現われており(1251-1350の初婚平均年令、男性30.1、女性15.35、差14.65)、Danteの『神曲』にも多少関係のある箇所がある。必ずしもこうした平均値の差が、そのまま現実の夫婦の年令差を意味するわけではないということは自明だとしても、やはり一般的には、夫婦の年令差が大きかったと見るべきことは当然である。その弊害については後で考える。(以上第七章)。

Herlihyはさらに第四部にわざわざ「結婚」という章を設定して、こうした問題を論じているが、そこで英国の人口学者Hajnalの「結婚の西欧型モデル(il modello euro-occidentale del matrimonio)」という概念を紹介する。それは男性(26-27才以上)、女性(23-24才以上)という比較的高年令での結婚と、男女共非婚者が多いという二つの特長を持っていて、主に18世紀、また地域により16-7世紀以来西ヨーロッパで普及した結婚の型だとされている。このモデルと比較するために、1) 初婚年令(すでに第七章で見た)と2) 独身率を考察する。1)に関しては、女性の初婚年令がフィレンツェでは著しく低いという点が違っており、残念ながら西欧型モデルの先駆とは言い難い。しかし男性の結婚が大変遅くて、独身の状態に止まっている期間が長いので、実質的に結婚適齢期の男性の15%が独身であり、そうした状態から生じるストレスの影響がフィレンツェ社会に感じられると指摘する。また同時にこの時代のフィレンツェには、男性は富裕であればあるほど結婚をためらう傾向があり、その結婚年令と資産との相関係数は0.94に達するとされている。女性の早婚と高額な持参金についてはDanteや、G.Villaniも言及しており、彼らのころから顕著だった(しかしそれ以前はそうでなかったとされている)。ペストの時期には、人口が急に減ったため、一時期持参金も下り、結婚も容易になったようだが、間もなく元に戻ってしまった。持参金に比して、修道院入りの支度金は半額以下(Giovanni Corsiniによると持参金なら600フィオリノかかる時、修道院入りなら230ですむという)だったので、修道院入りの娘も多かった。カタストの調査結果では、こうした状況を反映し、良家の娘は持参金の安い「下層相手」の結婚を選び、男性は一般に「上層相手」の結婚を求めた。そこで中流の娘は結婚のチャンスが減少し、一部は上層と結婚、一部は修道院入りを選ばざるをえなかったとされている。

私が今知りたいことは、果してDanteが記したようにある時期から女性の初婚年令が低下したのか、またそうした変化がもし生じたとすればその理由は何かということだが、この著書ではこうした疑問への解答は見出せない。

兎に角こうした特異性を持つフィレンツェ型結婚は、男性が若い頃商売に専念できる等といった利点を備えていたが、弊害も伴っていた。その弊害の一つは、男性が男やもめになる率に比して、女性は寡婦になる率をはるかに高いということで、53～57才で28.6%（男性は4.1%）、58～62才で45.9%（男性4.7%）、63～67才で52.9%（男性6%）となる。当時若い未亡人の再婚、三婚が多かったことを考えると、妻が年長の夫と死別する可能性は、この数字よりずっと高かった筈である。他方女性は40才を過ぎると、実際問題として再婚の可能性はほとんど失われたとされるが、女性の運命の不安定さは容易に想像できるだろう。

それに劣らず大きな被害を受けたのは、言うまでもなく子供であった。「出生」と題された章には、初めて親となった両親の平均年齢の表（P. 591）が見られるが、フィレンツェ市内では父が40.20才、母が27.13才で、ここでも13.07才もの差が見られる。平均寿命が短かった当時とすれば、40.20才の父は余りにも老いていた筈で、多くの父親が子供の訓練を放棄せねばならず、まだ子供が幼い内に死んで行った父親が多かったことも容易に想像できるだろう。父が死ぬと、母は子供を残して実家に戻ることは多かったといわれる。Giovanni Morelli は、子供が幼くして父を失うために生じる七つの損害について記し、⁽¹⁸⁾子孫に忠告を垂れているが、彼自身そうした損害を身を以て体験したために他ならない。

「幼少期と青年期」を扱った第十九章でも子供のことが扱われているが、子供を生むことが、当時の結婚の主要な目的であった。上層階級には乳母を雇う習慣が普及していた。人文学者 M. Palmieri は、母親の愛情を重視し、母親自身で授乳すべしと説いているが、1415年のフィレンツェの憲章で乳母の最高賃金（召使仲間では最高の年15フィオーリーノ）を決めていることから、広く行われた習慣だったことが分る。この習慣が生じた理由について、様々な説明が与えられているが、その普及度から考えると、やはり社会的理由によるものと見なさざるを得ず、15世紀フィレンツェの家族関係の特長である、家族内部での成員間の関係の不安定さに求められるとされている。つまりフィレンツェやトスカーナの女性には子供を育てる情熱が稀薄だが、それは彼女が家族の完全なメンバーではなく、夫が死ぬと子供を残してすぐ去るような立場にあったためだとされている。その分父親と子とのつながりは強く、子供の教育は父親が関心を払い、また子を失った父の悲しみの証言が多いとされている。その場合も関心の対象は男児であることが普通で、女の子は男の子ほどには、喜ばれず、関心も払われなかったように感じられるとする。そういえば、第十二章の男女の人口比較の箇所に棄て子を論じた部分（P. 458）があり、多くは主人と女奴隷の関係等特殊な事情から生れた子供だとはいうものの、San Gallo 修道院（大体棄て子は修道院の玄関に設けられた ruota（輪）とよばれる回転式設備を用いて、秘密の内に預けられた）では61.2%、La Sala では70%までが女児だったとされている。当然嬰兒殺しも女の子が対象となり易かった筈だし、先に見たように持参金儉約のため幼い内に修道院へ送りこまれるケースも多かった。だがこうした関門をくぐり抜けてうまく家庭内に止まり得た女の子は、ある年齢に達すると個室を持つなど、かえって男の子以上の特権を享受しえた。たしかに1427年の

カタストの結果では、こうした男の子優先の跡は歴然としていて、フィレンツェ市民の家庭には、未婚の3人の男の子に対して2人の女の子がいたとされ（勿論早婚の影響も大きい筈だが）、その平均年齢も男性が10.6才であるのに対して、女性は7.4才と幼い。なお独身の娘の人数6,304人に対して、息子は8,941人で、1対1.41と子供たちの性比にも大きなアンバランスが認められる。女性の早婚の原因には、こうしたアンバランスのために生じた、持参金を有するしかるべき女性の稀少性に由来する、一種の青田買い現象も（原因の全部ではないとしても、少なくともそれを維持する要因として）考えられるのではないか、というのが私の臆測である。

フィレンツェは大学ではない普通人の教育機関が早くから発達した都市として名高く、Villani の記録の真偽が今日もしばしば問題にされている。だが残念ながらカタストには教育に関する資料は無いようで、教育史の空白を埋めてはくれない。

子供といえば、近年大いに歴史学会で問題となった、中世には子供という概念が無く、小さな大人として扱われたとする Ariès の研究成果⁽¹⁹⁾を無視しえないであろう。私はすでにしばしば Ariès の説がそのままでは中世イタリア、特にフィレンツェの現実には合致せず、Ariès が「子供の発見」と呼んでいるような変化は、イタリアでは約二世紀早く起こっているのではないかという疑問を記したが、⁽²⁰⁾Herlihyの見解はどうであろうか。彼は「たしかに、トスカーナの親たちの行動は、フィリップ・アリエスによって描かれた構図とかなり合致する」⁽²¹⁾と一応はその説を受容するような口ぶりを示しておきながらも、「しかしこの態度を、幼児期や子供に対する無関心の証拠と解釈することは困難である」⁽²²⁾と批判、多くの文献により、「こうして中世以来、イタリア人の感受性は、幼児期の独特の魅力に対して開かれており、この態度は、永続的なものであることが明らかにされた」⁽²³⁾として、結局は Ariès の説がイタリアの現実には合致しないと見なしている。Herlihy の説と私と説が必ずしも一致するわけではないが、私が Ariès 説に関して提出した疑問が、イタリアに関しては十分根拠のあるものだったことだけは一応確認できるであろう。

トスカーナ（すなわち全領土内）で上流階級の男子は遅く結婚し、子供との年齢差は平均40才を上回っていた。彼らの多くは結婚した後も父や兄弟の家族と同居し、父の死後も長兄の監督を受けた。だから実際には子供から見ると父の影が薄く、おじ、兄、祖父の印象が結構強かったはずである。娘は早婚なので、祖父は娘の子を知って親しむ期間が長い。

しかし母の役割も、Morelli らが記したよりは重要だった可能性が大きい（と、Herlihy は前に記した父—子関係重視の態度をややトーン・ダウンさせている）。やはり夫を失った未亡人が自ら子供を育てるケースも現実には多かったはずで、女性の文化的役割は重要な影響を残し、むしろ男性の女性化さえ見られたとする。また老人と息子との財産争いや訴訟もよく見られたが、むしろ老婆の方が年齢と共に威厳を加え、教会人も、夫のある状態よりも未亡人の状態の方が道徳的にすぐれていると考えていた。

ところで当時のトスカーナの家族の規模や、そのタイプおよびその地域的特性についても、本

研究は多くの新しい情報を提供してくれる。この当時の家族の型については、Burckhard の画期的なルネサンス史研究以来いろいろな仮説が提出されているのだが、そうした学説史については、次節でもう少しくわしく検討することにして、ここでは筆者たちがカタストより得た統計的結果を簡単に紹介するにとどめたい。今述べた家族そのものについての資料は、特に第四部「第十七章 家族単位 (K)」と、「第五部 第十八章 親族と姻族」に示されている。

先ず第十七章では、相続権について触れられており、男性の子供たちには、平等に父の財産を相続する権利があったとする。女の子には、すでに見て来た通りかなり巨額の持参金を与えられる習慣があったが、相続権からは排除されていた。(P. 640) 私自身が Velluti の『家族年代記』を検討した結果では、女の子への持参金も実際には馬鹿にできず、また均等相続といっても、父の店や生産集団を分割することは極めて困難だったはずだから、結局は正式な結婚をして家業や公職等を受け継いだ有能な兄弟の内の一人又は少数の人々が、相続財産を集中的に継承管理する形に落ちついていたのではないかという推測を行ったことがあるが、それはたまたま私が論じたケースでそうした例が認められただけで、原則的にはあくまで、女子を除いた男子相続人の間で財産が均等分割されていたと考えるべきであるようだ。またそれ程巨額の遺産に恵まれたのはごく少数で、大半は少額の遺産だった筈だし、さらにフィレンツェの富自体、多くは金融的資産だったので、たとえ巨額な場合でも、比較的分割が容易だったとも見なされている。

第十七章で Klapisch-Zuber が示した統計によると、トスカーナ (フィレンツェ領内) における264,210人の家族数は59,770で、一家族平均は4.42人となっている。さらに成員のメンバーの数を基にした階層別統計によると、全家族の中で、成員数が4人未満の家族数は全体の44%、5人未満だと58.2%と約6割に及んでいる。ただし勿論大家族も多く、最大は約25人が同世帯で暮らしていたとされている。しかし6人以上の成員を有する家族となると全体の5分の1に達せず、10人以上となると3.6%にすぎない。だからフィレンツェ市民の間では圧倒的に夫婦単位の小家族、すなわち核家族が多かったことが分かる (P. 641)。

もう一つ興味深い事実は、フィレンツェ市内に関して、縦軸に家族の平均人数、横軸に資産を取った財産階層別の棒グラフを作る時 (P. 646) 資産ゼロから資産25~50フィオリノの階層まで2人乃至3人の間でわずかに人数が低下するが、その後は資産が増え、横軸が右に移動するにつれて確実に家族の人数が増加している (800~1600フィオリノの階層では4人、1660~3200では約5.5人、3200以上では6人を超える) という事実である。すなわちごく一般的に言って、フィレンツェでは明らかに資産が多い階層ほど、家族の人数が多いといえ、田舎でもほぼ同様のことがいえるのである。要するに、少数の富裕な人々が様々な種類の大家族を形成していたのを除くと、都会でも田舎でも、大部分の人々は核家族で生きていたと見て差支えなさそうだということになる。この事実はこれまで定説視されていた、(複合家族から核家族へという) ルネサンスの家族史上の変化に対する重大な異議申立ての役割を果たすことになったのだが、くわしいことは次節で触れたい。

なお最後に、当時定着しつつあった苗字すなわち「姓 (cognome)」の普及状況をカタストから眺めてみると、その利用度は地域的に以下の通りである。フィレンツェ市内36.7%、他の6市20.5%、田舎9.4%、平均16.3%となっている。フィレンツェの大家族は、他の家族より2～3世紀早く、永続的な「姓」を採用し始めていたらしい。フィレンツェの最も富裕な100家族中88%に「姓」があるのに対し、貧困な非課税階層1,493戸中、「姓」を用いているのは176戸でわずか12%にすぎない。こうした事実から、「姓」の採用も富と力の所産であることが分かる(第19章)。

こうした注目すべき事実を数え上げればきりがないので、この辺で打切ることにした。

私が興味を持って紹介した箇所が必ずしも重要かどうかは分らないし、興味を感じながらも引用できなかった箇所が余りにも多い。幸い本書の原著はフランス語で書かれており、イタリア語版よりも多くの人々に利用いただける筈なので、ヨーロッパ家族史に興味のある人々には是非読んでいただきたい。

なお Herlihy は、Alberti の『家族論』は、Machiavelli が自然的制度だった国家と君主を人工的制度として見直したのと同様、それより先に自然的制度である家族を人工的制度のごとく見直して戦略的に扱おうとした点に、Machiavelli と共通した独創性があると指摘しているが、興味ある意見としてついでに紹介しておきたい。

なお Herlihy には他にも多くのイタリアおよびヨーロッパ家族史研究の論文がある。その一部はロンドンで刊行されている Variorum Reprints シリーズの The Social History of Italy and Western Europe, 700–1500 (1978) や、Cities and Society in Medieval Italy (1980) に収録されている。その後者に含まれた「トスカーナ都市における暴力のいくつかの心理的および社会的ルーツ」⁽²⁵⁾ (pp.129–154) は、男女性比のアンバランスや父母の年令差が大き過ぎることから生じる弊害、父を早く失うことや、そうでなくても老人の父を持つ子と、未亡人の母や父方の親族の許で養育されることから子供が受ける被害や、その結果生じる暴力や無秩序等を具体的に論じた興味深い論文である。

また人口学的に極めて興味深いヨーロッパ型結婚が、トスカーナでは早くも14世紀に現われたことを、Herlihy は後者所収の「1201年より1430年におけるピストイア農村部における人口、疫病、および社会変化」⁽²⁶⁾の中で指摘しており、フィレンツェの状況とは結果を異にしているものの、時期、場所ともにほとんど重なっているために注目に価すると思われる。

他方 Klapisch-Zuber も、永年にわたって行って来た研究の成果を、『ルネサンス期フィレンツェにおける家族と女性』⁽²⁷⁾というタイトルで刊行。序文でも断っている通り、それは別個の問題を論じた11論文を収録していて、美術に描かれた結婚式からその儀式的あり方を探ったものから、家系図や家族年代記、命名の仕方、持参金、逆に男性から花嫁への贈り物、乳母、お手伝いや召使、当時の人形(幼児像)に至るまで多くの問題を丹念に論じていて、実に興味深い論文集である。第十論文「残酷な母、母性、寡婦身分、持参金」⁽²⁸⁾は、すでに何度も触れた、

(夫婦) 年令差の大きさ等から生じる女性の身分の不安定さについて論じ、多くの未亡人が「残

酷な母」たらざるを得なかった事情を論じて感動を誘う。

第二章 Marzio Barbagli 著

『同じ屋根の下で—15世紀から20世紀までのイタリアの家族の変化—』

本書は1948年、前書と同じボローニャのイル・ムリーノ社より刊行された研究書で、副題が示す通り、イタリアの家族の歴史的変化についての調査と考察を含んでいる。

前章にならって先ず目次を示すことにしよう。

「跋	P. 5
第一章 序文	9
第一部 家族の構造	
第二章 家族の構造の研究	31
第三章 核家族の定着 (1800—1970)	45
第四章 安定性と変化 (1400—1800)	139
第二部 家族関係	
第五章 家族関係の研究	265
セクション I 貴族階級における家族関係 (1500—1850)	
第六章 家族関係における謙譲、へだたり、親しみ	295
第七章 親密な夫婦主体の家族に向かって	353
セクション II 社会階級と家族関係 (1880—1940)	
第八章 家族の役割と儀礼	409
第九章 社会的へだたりと呼びかけの形式	485
結論的考察	513
附録	525」

作者は本書の第一章「序文」の中で、「家族」ということばによって了解される現実はいくつあるとし、その一つは「同じ屋根の下で (本書のタイトル)」生きる集団の大きさや構成など「家族の構造」と呼ばれるもの、第二は同集団の成員相互の権威や愛情に基づく「家族関係」と呼ばれるもの、第三はそうした集団間のつながり方、つまり「親族間の関係」とよばれるものだとする。ところが第三の現実については資料が乏しすぎるので、本論では前二者のみを扱うと予告し、実際その通りに第一部で「家族の構造」を扱い、第二部で「家族 (内の) の関係」を論じているわけである。

序文は、1. 問題、2. 研究対象の定義、3. 本書のプラン、4. 資料、5. 中—北部イタリアにおける家族の主要な変化、という5つの節で成り立っている。

先ず1. の「問題」において、20世紀の前半 (30～40年代) には近代家族の成立に向かった変化について、一応の定説らしいものがあったことと、しかし60年代以降の研究でそうした既成

の定説に疑問が生じていること、特に英、仏、米等に多くの新しい成果が生れていることを示した後、本書は中世末期より現代までの中一北部イタリアの家族の変化を把握する試みだとする。

2. についてはすでに記したが、3. で、著者は Peter Laslett の家族の5つの型の名称、「核」、「単独」、「拡大 (estesa)」、「多核 (molteplice)」、「無構造」(夫婦を含まぬ家族)、「単独者」とその定義を紹介し、「核家族」と、「拡大家族」や「多核家族」(両者を合わせて「複合 (complessa) 家族」とも呼ぶ)の比率や、前者から後者への移行をめぐる、従来の定説や説明には大いに疑問の余地があり、本書の第一部もそうした疑問を扱うことを予告する。4. の資料は、国勢調査の結果、教区の人名簿から、書簡、自伝、面接調査、その他多岐にわたることを示す。5. は大体本論で繰返されるので省略する。

第一節 イタリアにおける「家族の構造」の変化

多少安易な印象を与えるかも知れないが、本書の全体像を伝えるため、先ず序文同様、第一部(第二～四章)の各節のタイトルを列挙することから着手しよう。

第二章 家族の構造の研究 1. 核家族化とルネサンス、2. 核家族化、工業化、都市化、3. 近年の研究成果、4. 「伝統的」ヨーロッパの家の組織形態の類型学。

第三章 核家族の定着(1800-1970)、1. 19世紀の中一北部イタリアのいくつかのコムーネにおける家族、2. 家族発展のサイクルと個人の生涯のサイクル、3. 家族の構造の安定性、4. 田舎におけるプロレタリアート化、5. 都市化、6. 工業化の最初の段階、7. 二つの大戦間の核家族化の進行の遅れ、8. イタリアの家族地理と農業人口の定住地の形態、9. '50年代、'60年代における工業化、10. 結論。

第四章 安定性と変化(1400-1800)、1. 15世紀のトスカーナの家族、2. ペスト(mortalità)の危機、3. 16世紀中ごろの都市と田舎、4. 16世紀中ごろの都市の社会階級、a. 1545年のパルマ、b. 1560年のシエナ、C. 1545年のヴェローナ、5. 都市における変化、6. 18世紀半ばと19世紀初頭の都市の社会階級、a. フィレンツェ、b. ボローニャ、パルマ、ルッカ、7. 資産の伝達とその規則、8. 田舎における変化＝農地の分割、9. 家庭内の雇人、a. 都市で、b. 田舎で、10. 結論。

第二章では、先ず今世紀の前半に定説視され、後半にも根強く影響していた、イタリア家族の構造変化に関する説が紹介される。これは19世紀後半のヨーロッパで圧倒的な影響力を持った Burckhard 学説に合致する、ルネサンス都市(特にフィレンツェ)では、伝統的な複合家族が、近代化の先駆的現象であるルネサンスを通して、核家族に変化して行ったとする説で、今世紀の60年代に前述の Goldthwaite によって綿密な家族別研究に基づいて再提起されている。さらに時代を下って19～20世紀に関しても、工業化や都市化の結果として、やはり伝統的な複合家族が、核家族に変化したという仮説が、ほとんど疑問の余地なき真理のごとく受け入れられて来た。こ

うした近代化＝核家族化という図式は、恐らくイタリアのみならず、ヨーロッパ全体に通用する普遍的図式と考えられており、それ故一層定説として安定していた。

ところが今世紀の60年代以来、この定説に対する疑問が生じ始め、特にケンブリッジ大学の Laslett らの調査研究が、英国では16世紀以来新婚夫婦が新しく別居する習慣が続いており、故に核家族が主流を占めていて、別に工業化の結果ふえたわけではないという事実を証明し、工業化が核家族化をすすめたというよりも、むしろ逆に核家族が主流だったことが工業化を容易にしたのだと唱え始めたことが、伝統的な大家族制度という常識と、複合家族から核家族へという従来の図式を転覆させることになった。当然イタリアでも定説への再検討が始まり、Pacis はイタリアの状況は英国と違って、以前は複合家族の比率が高かったとした。その他にも Laslett 説への批判が次々と現われたが、Laslett はそれに答えるためヨーロッパを「西欧」、「中欧」、「地中海」、「東欧」の4区に分類し、問題のきめ手はやはり新婚夫婦が新居で独立する比率にあるとして、4区は先に挙げた順でその比率が高く、従って核家族が多いのだとする説を説いた。その説に従うと、第三の区域にあたるイタリアでは当然複合家族の比率が高まり、西欧諸国とはいくらか異った特性を持つことになる。かくしてその特性を再検討する必要に迫られる。

こうした問題意識に立った著者は、先ず第三章では、主に国勢調査の資料を駆使しつつ、19世紀後半より20世紀にかけてのイタリア中一北部の家族の構造の変化について、従来の定説が妥当かどうかを検討する。さらに南部に関しても論じて、南北の差異をも明らかにしている。

先ず19世紀に関しては、やはり核家族の方が比較的多くて、少数の例外を除くと一応過半数を占めてはいるが、英国の例などと比較すると、複合家族の比率は高く、多核家族のみを比較しても、英国4%に対して15～40%と大差がある。ただしその高率を、たとえば折半小作制だけでは説明できない。何故ならその制度のない地方でも同様に高いからだ。

著者 Barbagli は、ボローニャ近郊の農村 San Giovanni in Persiceto (以下 S. G. と略) とフェルラーラとを比較して、田舎と都市の差異を追求する。田舎の村 S. G. では、一応核家族が主流(約6割)だとはいえ、拡大と多核のいずれも1割以上あり、複合家族は3割を占め、しかも1881年以後1911年まで殆んど比率に変化が見られない。しかし同一家族そのものは案外構造を変えている。そうした変化が何故生じるかといえ、人生の各段階に応じて異った家族構造を採用しているからだとする。著者は生涯を4期に分け、各々の段階に属する家族構造を調べ、たとえば第4期(50才以上)に入ると、核家族から多核家族に変わる人がかなりいるとする。男女共にそれら4段階を越えるにつれて異った構造の家族に住むとする。だからこのように変換を繰り返す個人の変化を考慮すると、社会全体の家族の比率は意外と安定しているとされる。

農村では、家族が生産単位となる場合がある。たとえば折半小作人、ボアーロ(年契約の固定的雇人)、日雇い農民(ブラッチャンテ)等々で生産に関する家族の役割は異なっている。ところが家族が生産手段を持たぬ日雇い農民の間でも、結構複合家族が見られる。それは家族が助け合う習慣に基づいているからである。工業化も従来見られたように核家族化への決定的衝撃とは

なりえない（しかし一応有利に働く）。ミラノの近郊では、土地を離れず、しかも工業に従事する者が多い。要するに工業化は、農民と出身地とを切り離さないかぎり、核家族化をすすめないとされている。なお大戦間期、核家族化が停滞したが、これは地主の土地放れで小作農が自分の土地を持った独立農民に変わったのだと見られている。

ところで意外なようだが、南部の方が核家族は古くから普及していた（Tab, III, 25）。それは新婚夫婦が親の家に住まないためで、農民の家族の平均人数も南部の方が北部よりかなり少ないためである（P. 117のTab, III, 26）。これは村の形態にも関係があり、南部は散村の率がずっと低く（すなわち集村が多い）、北部は逆に集村の比率が低い（Tab, III, 27）ためであるとする。

ただし20世紀の50～60年代のイタリアでは、工業化は家族構造に変化を与えたといえる。しかしそれは農民を故郷から切り離して市内に招いた結果である。なお南部には専業の農家が多く、中北部には兼業農家が多い。こうして見ると、近代化による直線的核家族化はイタリアには見られない。そして工業化の影響もゆっくりとしか現われなかったのだとする。

著者はさらに射程を長くして、次の章では第三章で扱った時期以前の段階の400年間の変化を検討する。その出発点で、前章で見た Herlihy と Klapisch-Zuber の15世紀に関する研究が、「記念碑的調査」（P. 142）だとして紹介される。フィレンツェでは多核家族が7.8%だったのに、周辺部では22.8%に及ぶとして、その違いが重視されている。市内における夫婦の大きな年齢差等新しい事実も伝えられた後に、二人の研究がルネサンス期において核家族化が進んだとする仮説を決定的に危ういものにしたとして、Goldthwaite 説を批判、Berengo、Kent ら一連の批判者の立場が強固なものとなったことを示す。つまり本来中小市民の間では核家族が主流を占め、他方富裕な市民の家庭は安定した複合家族であり続けたとされている。

次にペストの影響は大きく、多くの死者や外地への逃走のため、家族構造は大きく変わったとされている。続いて資料の残っているいくつかの都市について16世紀の状況が検討される。それらの結果も、要するに都市の家族の大部分は核家族だったことを示している。また前章でフィレンツェに関して見た、富裕な層ほど複合家族の率が高く、人数が多いという傾向は、他の都市にも共通している現象らしい。

財産の相続に関しては、分割は一層困難となり、「信託遺贈（fedecompresso）」と「長子制（primogenitura）」の制度が普及する。後者はスペイン支配の影響ともいわれるが、はっきりした文献的証拠はなく、貴族階級の閉鎖化への動きの現われとも見なしう。それらの変化と共に男女共独身者が増加し、16～17世紀フィレンツェの貴族は60%が生涯独身で過ごし、1600～1649年のミラノでも、貴族の男性の半分と、女性の4分の3（T. IV. 24）が独身で、後に見る通り貴族の家庭では不自然な風習が守られる。こうした状況に対し、18世紀後半に変化が生じ始める。知識人は「信託遺贈」という制度の廃止を主張し始め、やがてフランス革命の衝撃と共に旧貴族体制が崩れて、一括相続の制度は消滅していく。

田舎でも市民が田舎の土地を入手して地主化し、逆に地主が都市に出て不在地主化する。すで

に1320年のシエナで、市民が田舎の土地を所有している比率は、70～80%に達している。折半小作制がますます普及し、田舎の財産は再編され、中一北部では散村化が進む。トスカーナがこうした変化の先進地域で、早くも13世紀の中ごろからこうした農地の再編が進んだ。しかし折半小作制の普及はもっと遅れて進行、またより短期（たとえば1年）の小作契約も行われたが、たとえばフィレンツェの田舎では1427年のカスト当時でも、折半小作人が18.9%、短期の小作人が4.3%で、大部分は自作農だったとされており、19世紀後半と比較しても小作人の比率ははるかに低い。折半小作人の間では多核家族の比率が31%と平均よりはるかに高い。それが18～9世紀となると、ピサのLorenzana e Luciana (1794) の88%のように驚くべき高率に達する。だから折半小作制の普及が複合家族の比率を高めたことは明白であるとする。だが中一北部イタリアの田舎では、折半小作制の普及しない所でも複合家族（特に多核家族）の比率が都市に比して高い。

南部については、資料が少ないが、1753年のモリーゼ州のAgnone村では、核家族 55%、拡大家族 16%、多核家族 16%であり、中一北部はど家族の複合家族化が進まなかったことが推察される。やはり日雇い農民が多くて折半小作制等家族ぐるみの長期契約が発達しなかったことが原因らしい。

本書は、15～18世紀の家庭内雇人（召使、家婢等）についても調査して、都市と田舎（そこでは労働力でもある）とに分けて考察、低賃金だが飲食の経費等で結構高くついていた状況について興味深い資料を示している。しかし紙数の都合で省略し、第三章の結論を見ると、都市では早くも11～12世紀から核家族が主流だったらしいとされ、人々は田舎から都市に住むことで核家族化する傾向があったと見なされている。しかし17～18世紀の間に、都市では少なくとも4つの変化が生じたと著者はいう。それは1. 死亡率の低下、2. 核家族化の一層の普及、3. 貴族や富裕な商人階級が複合家族の維持を放棄して一般市民に合流したこと、4. さらに最も明白な変化として家庭内雇人に関して大変化（大巾な減少等）が生じたこと。田舎については、R.Romano が指摘した「15～6世紀の農民と市民の分裂」すなわち農民の社会的孤立化の影響もあって、特に南部については不明な点が多すぎるとする。だが兎に角、18世紀の後半から19世紀の前半にかけて、イタリアでは多核家族、ひいては複合家族の比率がピークに達するが、これは16世紀末ごろ以来の都市から田舎への人口の締め出し等によるものに見なされている。だとするとやはり都市化こそ、核家族化への重大な要因であることを認めざるを得ないことになる。

このようにLaslettらの研究に触発されて行われた、都市化や工業化による家族構造の変化の説明の再検討は、南部の田舎における早くからの核家族化とか、北部近郊地帯での自宅通勤可能なための核家族化の遅れとか、ライフ・サイクルによる家族構造の変化等々新しい事実をいくつか書き加えたものの、やはり都市化や工業化を重視する従来の常識を書き改めるにはいたらず、部分的にはそれを再確認しているようである。だが一見歯切れの悪い結論は、資料自体とその不足への誠実な対応の結果として、むしろ評価すべきだろう。

第二節 イタリアにおける家族の成員間の関係について

前節同様第二部（第五章～第九章）の各節の標題を列挙しておく。

第五章 家族関係の研究、1. 二つの対立する理論、2. 愛情と権威の関係、3. 相互関係と言語的慣用、4. イタリア語の呼称形態のレパートリー。

セクション I 貴族階級における家族関係（1500—1850）

第六章 家族関係における謙譲、へだたり、親しみ、1. 事例分析—レオパルディ家の場合、2. 両親、子供、兄弟姉妹、3. 家庭教師、聖職者、寄宿学校、4. 両親、子供、兄弟姉妹間の関係の変化、5. 夫婦、6. 結論。

第七章 親密な夫婦主体の家族に向って、1. 結婚と多産性、2. 夫と奉仕の騎士（チチズベオ）、3. 子供の育て方について、3. 1. 乳母の制度、3. 2. 乳母自身、3. 3. 乳母の授乳と母親の冷淡、4. 子供の育て方の変化、4. 結論。

セクション II 社会階級と家族関係（1880—1940）

第八章 家族の役割と儀礼、1. 結婚、2. 家族内の権力関係、2. 1. 食事の際の関係、3. 家屋内と農場との分業、4. 余暇における役割の遊離、5. 愛情表現。

第九章 社会的へだたりと呼びかけの形式、1. 親と子、2. 夫婦、3. 親戚、4. 姑をどう呼ぶか。

結論的考察（節分けなし）。

以上の見出しによっても、ほぼ内容は推察できる筈だが、著者はこれまでとは打って変った、書簡やことばの調査等の方法を駆使して、家族成員間の関係を分析し、やはり非連続的な印象は否めないものの、一応通時的にその変化をトレースしている。

第五章では以後の問題や方法論が検討されている。

かつてイタリアに限らずヨーロッパ全域において、家族間の関係はより権威主義的であったが、それが近代市民家族に見られる親密な関係に移行した契機は何か。こうした疑問に対して、著者はやはり対立する二つの学説を紹介する。その一つは、変化の契機を18世紀後半の「産業資本主義」の誕生と発達とに求める E. Shorter の説で、産業資本主義の発達と共に都市に集中した若いプロレタリアートが市場経済のメンタリティーを獲得し、それが家族関係にも波及し、また中産階級の生活水準の高まりが父—子関係を変えたのだとする。それに対して L. Stone は、英国において夫と妻と子供とが愛情の紐によって結ばれる近代的家族が出現し始めるのは早くも1620年ごろからで、18世紀を通してそれは定着していくが、こうした早い時期から考えて、産業資本主義の結果とは認め難く、むしろ経済、社会、政治的諸要因に基づく個人主義の誕生に由来するもののだとすると共に、それを生み出した主体は、上層ブルジョワと地主階級で、その両者の間に生じた変化が上下の階級へと拡がったのだとする。

著者はそれらの説に対して、資料不足等のためにどちらが正しいとも判定し難いが、イタリア

にも似たような変化が認められるので、調査する必要があるとする。その際に二人称の呼びかけの言葉や敬称が分析の手掛かりとして利用しうることを指摘している。すなわちイタリア語で二人称の敬称《voi》が確立されたのはようやく14世紀のことだが、15世紀以来《vostra Signoria》が普及、それが長すぎるので15～6世紀の間に《vossignoria》、《ella》、《lei》が出現したが、《voi》も生き残った（と著者はpp.279-282にまとめる）ので、それらと《tu》の頻度を調べれば家族成員間のへだたりも予測できるものと考えている。こうして第六章以下で、敬称や呼び方を分析することによって、家族間の関係の通時的变化が明らかにされている。

その内第六章、第七章にまたがるセクションIは、特に貴族階級における家族成員間の関係に焦点をあてている。第六章では先ず詩人 Leopardi の家族が対象に選ばれていて、18世紀末頃から19世紀初頭にかけてのイタリア中部の貴族の慣用が明らかにされている。家族間の前に友人間について調査され、詩人 Giacomo と友人 P. Giordani の文通では、2年間《voi》を使った後、詩人自身は多少抵抗を感じながらも、互いに《tu》を用いている。人妻の恋人 Teresa Malvezzi 伯爵夫人に対しては、《lei》→《voi》→《lei》と変化した。他方家族内では、父→息子は《voi》、子→父は《lei》または《ella》、母→息子は《voi》、子→母は《lei》で一貫し、また Giacomo は一貫して父母に完全に服従していた。しかし兄弟（および兄妹）間では、《tu》と《voi》併用から、《tu》のみに変化していき、まさに過渡期に当たっていたことが分かるという。M. D' Azeglio や C. Gozzi の場合も調べられている。

7才で入学して12～3年も学び、休暇さえ家へ帰ることは稀だったという Collegio（寄宿学校）や、多数いた下僕や家婢がさらに親と子の関係を疎遠にしていた。大体こうした関係が発達したのは15世紀末以降のことで、その後貴族階級においてのみ、ことばはより丁寧により大げさになっていったという。しかしそうした疎遠な関係から、やがて一転して親密な関係に変化していく。19世紀の初頭に、そうした変化を慨嘆する声が記録されているという。どうやら18世紀からそうした変化が始まったといえそうである。同時に名前自体師が Marianna から、妹が Laura といった風に短くなる傾向があったとされる。

夫婦の間でも似たような変化があり、先ず18世紀に《lei》から《voi》に、そして18世紀から19世紀にまたがる時期に、《tu》へと変化、また cara と名前をつけたり《mia bimba》などと妻を呼ぶに至ったという。こうして権威主義的家族が民主的家族に変化したのは、18世紀末から19世紀初頭にかけての時期だったと推定されている。

第七章は親密な夫婦主体の家族が、貴族階級の主流を占めるまでの過程と時期が検討されている。先ず権威主義的家族の時代には、所得が大きければ大きい程、また階級が高いほど夫婦の年齢差が大きかったことが実証されている。その差も18世紀を通じてやや減少に向い、19世紀の後半には18世紀前半の半分近く（12才→6.3才）に減少しているという。また18世紀後半にはパス・コントロールが始まり、子供が減り始めるが、それ以前は平均6人、2割の夫婦が10人以上の子持ちという多産ぶりだった。

夫婦の年令差を補うために、イタリア独自の習俗として *cicisbeo* (チチズベオ 奉仕の騎士) という制度があった。それは妻に常に仕えて奉仕する男性の存在を公認する制度で、多くの都市では3人の騎士を持つことが当然とされていた。必ずしも愛人とは限らぬが、大抵ほとんど四六時中行動を共にするので、肉体関係は生じやすい。貴族は後継ぎの長男のみは自分の子であることを望んだが、他は誰の子か大して問題にしなかったとされている。時には婚約の条件に、*cicisbeo* の名を記入することすらあった。関係は、10～20年、時には40年も続いた。たとえば夫婦が愛し合っているにもかかわらず夫婦の行動半径が異っていたので奉仕の騎士が必要であった。時には外国人や80才を越える老人が選ばれることもあった。英国の文人 Boswell もイタリア滞在中、シエナの Piccolomini 家の貴婦人の *cicisbeo* だったという。Stendhal もその痕跡を見聞したが、すでに貴族女性の古い世代のみに見出せる習俗となっているとしており、すでに18世紀末には消滅しつつあったことが分る。

イタリアの子育てには、①新生児を帯状の布でぐるぐる巻きにする、②長期間乳で育てる、③乳母をやとうという3大奇習があったとされる。その乳母雇傭の制度、乳母の実態、その影響等が記されている。その一つの原因は多産にあると見られている。乳母を雇うからといって母親に愛情が欠けていたわけではない。住み込みの他に、乳母の家に預ける例も多かったが、その場合も親は毎日通ったりして注意を払い、報告を受けていた。そうした記録が今日まで残っている。しかしやがて乳母のなり手が減り、貴族は自分たちで子育てを行い始めた。父親が新しいやり方に熱中したので、母親が少々従った例もある。こうした変化は18世紀後半のバース・コントロールの開始時期とはほぼ重なっている。他の様々の変化とも関連して、貴族階級の核家族化を促進したとされている。予防接種は E. Jenner が18世紀末に始めたとされているが、イタリアでは早くも18世紀中ごろ、医師グループがこの方法を推進していたとされ、前述の変化の時期と一致する。

セクションIIは、社会階級と家族間の関係を見るために、儀礼や役割、家族内におけるへだたりの意識の階級差等を、19世紀末より20世紀半ばについて検討を加えている。まさにこの部分こそ、国家統一後のイタリア人の家族の変化、つまり現代風の家族の形成を論じている点で貴重である。第八章、第九章を通じて、20世紀初頭の中北部イタリアの家族間の関係に関する極めて興味深い統計が多数示されているが、それらは、1974年より、イタリア中北部の多くの地点で、1890－1910年生れの結婚歴のある女性801人を対象にした面接調査を基にしたもの (P. 540) で、まさに今日では忘れられようとしている今世紀初頭のイタリア家族の実態に関する証言となっている。

第八章ではまず結婚について、儀式に父母が参加する率や新婚旅行に行く率が、職業別に示されている。また花嫁が実家の窓や椅子にしがみついたり、姑ときまり文句のやりとりをする等の習俗等も紹介されている。新婚夫婦の属する家族の家長が誰かも職業別に示されている。それらの結果は、後の各事項と同様、田舎の農民層に伝統的性格が根強く残っていたことを示す。次に食事の儀礼や座り方 (女性が食卓につけない比率等) が明らかにされている。あるいは家の内外

における分業、余暇の過ごし方等についても統計的に明らかにされている。いずれもほぼ常識通り、都市の富裕な高学歴の階層で先ず現代風の家族が形成されたことを裏付けている。

第九章では、親子間、夫婦間、嫁姑等の呼び方について、いかなる代名詞が使われたかを統計的に示している。やはり前章の場合と同様、子が父を呼ぶ代名詞は、農民階層に《voi》が比較的多かったのに対し、都市の富裕な階層では《tu》が圧倒的に多く、家族間の親密化が後者において早く進んだことが示され、夫婦間においても、農民（特に折半小作農）に、妻から夫を《voi》で呼ぶ習慣が比較的根強かった。嫁姑間に関しても、職業や学歴別に同様の調査結果が示されていて、学歴が高い方が対等に《tu》で呼び合う比率が高まること、逆に無学歴層では《voi》－《tu》又は対等に《voi》－《voi》で呼び合うこと、中間層では《lei》－《tu》が最も多いが、《lei》－《tu》は高学歴層にも多いこと等が示されていて興味深い。これらすべての結果は、家族成員相互間の関係に大きな変化が生じたのは、都市の富裕な階層からだったことを示している。すでに見た通り、早くも15世紀に都市の小市民層は核家族化していたことを考えると、イタリアでは家族の構造の変化は下から上へと伝わり、家族の関係の変化は上から下へと伝わったということもできるとし、双方の関係がねじれていることが指摘されている。

こうした一連の研究成果のまとめとして、「伝統的」家族と「現代的」家族を一本の分水嶺で分割しようとする試みは、イタリアにおいては空しい試みだと先ず Barbagli は指摘している。

たとえば産業資本主義との関係にしても、イタリアでは少なくとも15世紀末の都市においては、圧倒的に核家族が多かったという事実もあって、核家族化の契機とは見なし難いはずだが、やはり今世紀において中北部の田舎での核家族化が進んだという事実は否定できない。この背景には（推測にすぎないと断っているが）同地方の田舎において、14世紀末から多核家族等の複合家族がふえ始め、18世紀後半より19世紀初頭にピークに達したという事情が作用していて、やはり家族構造に産業資本主義が及ぼした影響を完全には否定できないとされている。だが家族の関係については、産業資本主義よりも早い時期に進行していて、Shorter の説は成立せず、Stone の伝染説（パイオニア的な少数家族の試みが多数によって模倣されたとするもの）が目下唯一の有力な説だが、それだけでは不十分で、アンシェン・レジームの崩壊が関係しているはずだと指摘されている。

注

- (1) J.Koenig, *Il «popolo» dell' Italia del Nord nel XIII secolo*, Bologna 1986.
- (2) G.Salvemini, *Magnati e popolani in Firenze dal 1280 al 1295*, Firenze 1899 e 1960.
- (3) N.Ottokar, *Il Comune di Firenze alla fine del Duecento*, Firenze 1926 e 1974.
- (4) Jacques Heers, *Il clan familiare nel Medioevo*, Napoli 1974.
- (5) 注(1), p.22.
- (6) Ph.Jones, *Economia e Società nell'Italia medievale, la leggenda della borghesia*, in "Storia d' Italia", *Annali*, Vol. I., *Dal Feudalesimo al Capitalismo*, Torino 1978.
- (7) P.Villari, *I primi due secoli della storia di Firenze*, Firenze 1945.
- (8) R.Davidsohn, *Storia di Firenze*, Voll. I – VIII, Firenze 1972–3.
- (9) Id. *Forschungen zur Geschichte von Florenz*, Voll. I – IV, Berlin 1896–1908.
- (10) S.Raveggi, M.Tarassi, D.Medici, P.Parenti, Ghibellini, Guelfi e Popolo Grasso, *I detentori del potere politico a Firenze nella seconda metà del Duecento*, Firenze 1978.
- (11) R.A.Goldthwaite, *Private Wealth in Renaissance Florence, A study of four families*, Princeton 1968.
- (12) 拙稿、ダンテの作品における「家」の意味(2)、イタリア学会誌 26、P.17の注(11)、京都 1978.
- (13) F.W.Kent, *Household and Lineage in Renaissance Florence, The Family Life of the Capponi, Ginori, and Ruccellai*, Princeton 1977.
- (14) South Carolina 大学出版部より出た Renée Neu Watkins 訳による *The Family in Renaissance Florence*, Columbia S.C., 1969, およびそのわずか2年後 Bucknell 大学出版部より出た G.A.Guarino 訳 *The Albertis of Florence: Leon Battista Alberti's Della Famiglia*, Cranbury 1971.
- (15) D.Herlihy et Ch.Klapisch-Zuber, *Les Toscans et leur familles. Une étude du catasto florentin de 1427*, Paris 1978. およびそのイタリア語訳 *I toscani e le loro famiglie, Uno studio sul catasto fiorentino del 1427*, Bologna 1988.
 なおついでに2人の著者の略歴を記したい所だが、残念ながら Herlihy は、1988年現在 Harvard 大学の docente (教師陣の一人) だということしか分らない。Ch.Klapisch-Zuber はバリの Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales の Directeur d' Etudes であるとされている。本論の引用はイタリア語版から行う。
- (16) 斎藤修編著、ピーター・ラスレット他原著、*家族と人口の歴史社会学—ケンブリッジ・グループの成果—*, 東京 1980参照。
- (17) M.Barbagli, *Sotto lo stesso tetto, Mutamento della famiglia in Italia dal XV al XX secolo*, Bologna 1984. なおこの著者も年令等は不明だが、その記述より、長く Trento で研究調査に従事した後、今日はポーニャ大学で社会学を教えていて、教育、政治、家族に関する歴史的かつ社会学的研究を多数発表しており、『イタリアにおける知識人の失業と学校制度(1859–1973)』というイル・ムリーノ社刊の書物の翻訳はコロンビア大学出版部から刊行されているということである。
- (18) G.Morelli, *Ricordi*, a cura di V.Branca, Firenze 1956, pp.202–287.
- (19) Ph.アリエス著、杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族』、東京、1980.
- (20) 拙稿、中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機、大阪外国語大学学報第69号(1985)所収、pp.68–69.
- (21) 注(15), p.770.
- (22) Id., p.771.
- (23) Id., p.772.
- (24) 拙稿、ドナート・ヴェッルーティの『家族年代記』について その(二)、大阪外国語大学学報第51号

- (1981) 所収、pp.98-99.
- (25) D. Herlihy, Some Psychological and Social Roots of Violence in the Tuscan cities, in "Cities and Society in Medieval Italy", London 1980.
- (26) Id., Population, Plague and Social Change in Rural Pistoia, 1201-1430. 人口史の権威 Wrigley もこの報告に注目して取上げており、さらにこのヨーロッパ型結婚の起源と時期の謎を解くことが人口学に対する大きな貢献となると記している。E.A. リグリュイ著、速水融訳、人口と歴史、東京 1981、pp.100-101.
- (27) Ch.Klapisch-Zuber, La famiglia e le donne nel Rinascimento a Firenze, Roma Bari 1988.
- (28) Id., pp.285-303所収、La «madre crudele». Maternità, vedovanza e dote nella Firenze dei secoli XIV e XV.

(1990. 5. 7 受理)